ば

今回のリサーチ期間中で初めての島

生徒たちの緊張もほぐれたように見え 小学校の先生も様子を見に来ており、

うに写真に写る子供たちはとても微笑

した。自分の絵を持ちながら、嬉しそ ケッチを描いた後は、浜で記念撮影を だ。三十分から四十分くらいかけてス もいて、それぞれが楽しんでいたよう 飽きたらず、二枚目に突入する男の子 いでいる姿が見られた。一枚だけでは

ましかった。

た

あ

定の開催日でもあったが、試験のあと 集まったのは約十五人。今日は漢字検 着し、保育園児から小学校六年生まで 時になると、徐々に浜に子供たちが到 会が昨日伊ヶ谷浜で開かれた。午後 民との交流イベント、水中スケッチ大

に駆けつけてくれた女の子もいて、会

水中スケッチ大会

伊 ヶ谷浜で水遊びをする子供たち

従いながら水中スケッチを楽しむ。 学生がリーダーとなり七つのグループ びに行くが、水中でスケッチを描いた ながらスケッチを描く。海にはよく遊 専用のクレヨンを使って、水際で濡れ が中心となったイベントで、ユポ紙と に別れた。子供たちも分散し、指示に 比野先生から大会の説明が終わると、 ことがある子供は誰もいなかった。日 東京藝術大学の日比野研究室チーム

場は元気な声であふれていた。また、



普段全く経験しないことだけに、 -実際に水中スケッチを体験してみて

を描いているうちに気分が盛り上が

子供の頃に戻ったような気持ちで

第 号 滑りがなめらかなような気がした。 に描く。いつもよりも、クレヨンの 水を感じながら、水中のキャンパス をする感覚は不思議で、足に冷たい ることができた。水の中でスケッチ

2011年

(平成 23 年)

あしたばん編集部 発行所:加藤文俊研究室

ashitaban@vanotica.net

月20日

茶色を使って海を表したり、 描いたりしていた。 見たままを描く子供たちは、

やってきたようだった。 子供たちには少し早い夏休みが

めは戸惑ってなかなか描き出せなくて

徐々に調子が上がり、

海ではしゃ

(新飼 麻友・高木

大久保浜はステージ

年家族とともに島に戻って来たと は二〇〇〇年に東京へ避難し、昨 る山下広範さんだった。山下さん る方へ歩いて行くと、そこにいた 浜に訪れると、どこからかサック に座っている人が見える。音の鳴 してみると、遠目に車のトランク スの音が聴こえてきた。目を凝ら ンタビューをするために、大久保 日比野先生の水中スケッチのイ 浜の近くでお店を出してい

けで、サックス以外にもいろいろ 持ち出し、習い始めることにした。 のための音楽教室の案内を見て ていた。東京へ避難した時、 ようになること。「避難がきっか 目標は、自分の好きな曲が吹ける しばらく家に置きっぱなしになっ 度は島に置いて来たサックスを



姪から買い取ったサックスは、 砂浜を やり考えていた。 んかやったら面白そうだなあとぼん れた。いつか大久保浜で、島の皆さ のなんだよ。」と私たちに教えてく は自分にとってステージのようなも きる場が多くはないけれど、この浜 だ。「島内には練習の成果を披露で 出てサックスを練習しているそう 日曜日など、時間がある時には浜へ た」と笑顔で話してくれた。現在は ばかりじゃなくて、意外と楽しかっ んを集めてライブフェスティバルな な習い事ができた。 避難生活は辛

こ の 「あしたばん」は、 加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています ないわたしでも、多彩に多様に表現す スケッチを楽しんでしまった。得意で







日比野克彦氏による水中スケッチ

われるためだ。 るのは、アーティスト・日比野克彦氏 による実験的ともいえる作品制作が行 ここに集まる二十数人の間に緊張が走 波は高く、大きな音を合間なくたてる 黒い砂浜と、透明な海。十九日午前

思議な感覚が見た人に広がる。 まま海に入り込んでスケッチをすると り組みは、砂浜から紙を伸ばし、その いうもの。百メートルにも及ぶ紙を海 、広げる…この行為だけで異様な、 日比野氏のスケッチは、とにかく速 「水中スケッチ」と呼ばれるこの取

ば

ん

た

と思うと目の前にある人の影、海岸と ヨンの線が残る。山から覗く民家、か 腕を動かす。その通りに、オイルクレ 格好で、次々に「見たもの」に沿って の軌跡の集大成だ。 上に集まる線たちは、 道路をつなぐ階段、砂浜の砂利。直線 い。紙に身体をへばりつかせるような 日比野氏の視界

曲がる紙を両手で押さえ続け、押さえ 描き続ける。思いもよらぬ方向に折れ り、浮かび、沈む。波と戦いながら あった。」と話した。緊張と集中の中 れない」と思いながらも、日比野氏は 見守る人々が「もう継続は無理かもし 白い紙は波の起こるままに折れ曲が ながらも、背中で迫り来る水を感じて いて、どうしようかとも頭のなかに スケッチの後、日比野氏は「砂浜にい そして、いよいよ水の中へ向かう。



につく船の気持ちになったような感覚 は衝撃で身体に染み付いたし、三宅島 そして水中に入る連続した行為。これ 感じたことだった。「砂から波打ち際、 野氏が語ったのは、この水中を通して た波、すべての軌跡であるのだ。日比 のは砂浜から見える景色と水中で感じ だろう。しかし、ここに刻まれている 表現を自由に描く環境ではきっとない 傷つけるように、象徴的にそこにある。 中に入った」という確かな印が、紙を 向に描き方が変わる。「ここから海の ことで砂浜上とは、予想しなかった方 ている「跡」を刻み付けるのだ。この 砂浜から海。絵を描く時に、自分の

大西

島が好きで好きで 仕方がないから

に遊びにくるうちに、その魅力にとり 喜史さん。小さな頃から三宅島の別荘 した理由を語ってくれたのは梶野亜 そう言って、三宅島に移り住むこと

> 奥さんと四人のお子さんは東京に今も 住んでいるそうだ。 さんご自身は三宅島に戻ってきたが、 に、二○○○年の噴火が起きた。梶野 宅島に住み始めようとしていた矢先 くなったため、新築に建て替えて、三

らうこともしばしばあるそう。 応だ。農家のお年寄りからスイカをも 乗ってくる高校生が来ないと、少し他 う、おもてなしの心をもってふれあう。 くってリピーターになってもらえるよ 事にしているのは「ふれあい」。観光 いする。本数が少ない島ならではの対 のお客さんにも待ってもらうようお願 路線バスを運転するときに、いつも バスでは、お客さんにいい想い出をつ 運転手をするようになった。そこで大 島に戻ってから、梶野さんはバスの

ある。それも、乗客の顔が見えている に自分たちで塗り直したりすることも 古のバスを、噴火以前のカラーリング で駄目になってしまって買い替えた中 て観光バスの経路を変更したり、噴火 噴火後に変わった島内の状況を鑑み



梶野さんだからのことだろう。 「子どもたちの集まる場所を作って

つかれていったそうだ。その別荘が古

ろん、その他にも遊べる環境、人が集 少しでもその環境づくりのきっかけに せていた。 いと、私たちの中でイメージを膨らま との思いを伺ううちに、三宅島大学を まることのできる場を作ってあげたい 持つ子どもたちに、豊かな自然はもち を語ってくれた。バスのフリー切符を あげたい。」大好きな島に対する希望 したい、三宅島大学を活かしていきた (飯田 達彦・森部 綾子

メートルの

コミュニケーショ

が入り交じって一心不乱に太鼓を叩い もから、上は六十歳を超えた年配の方 下はまだ小学校にも通っていない子ど 体育館に絶え間なく響く太鼓の音。

の文化、歴史を伝えている。 う語るのは津村晉さんだ。自身三回の 温和な口調で休憩中の子どもたちにそ 日曜日に太鼓を通して地元の人々に島 避難したこともある津村さんは、 噴火を経験して、家族を台車に乗せて て、木遣の起原は労働歌なんだよ」。 | 木遺太鼓は江戸時代から続いてい 毎週

互いに通じ合うことが出来る瞬間 手の鼓動を感じ合う。言葉はなくとも 際、最も有効な方法とのこと。なるほ を超えたコミュニケーションを取る 挟み、片面ずつ真剣に太鼓を叩き、 ど、太鼓を介して一メートルの距離を 津村さん曰く、祭りや太鼓は、世代

保育園の頃から子どもたちに太鼓を数 と、叩き手不足の対策として最近では 足していると口にしていたが体育館に えているとのこと。 大勢いた。その理由を津村さんに伺う は保育園児を始めとする子どもたちも 最近は人口不足に伴い、叩き手も不

鼓を通して祈りを届けたいと、はっき あった被災地の東北の人々に対して大 種類は違えど、共に自然災害の被害に は女性の祭りの参加が禁止されていた りした口調で語ってくれた津村さん。 等の理由もあるが、非常に驚きである いそうだね」。その背景として、以前 子の方が祭りが好きなんだね。ぜった に続けるのは女の子なんだよね。女の トするけど、長くやっていると辞めず 発見をしたらしい。津村さんは語る。 に子どもたちが増えたと同時に意外な 「最近では最初から男女同時にスター メートルの距離で紡いでいくその相 そうした活動の甲斐あって、叩き手

将成

いはきっと東北に届いています。